

令和7年度 学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	実現状況の達成度判断基準	最終評価	分析（成果と課題）及び次年度の対応
<p>1 学びのある学校</p> <p>・学習習慣の確立に向けた指導や学力層・個に応じた学習指導により、上級学校進学のための学力を保障をする。</p> <p>・授業において、GIGAスクール構想を踏まえ一人一台端末の効果的な活用や主体的、対話的で深い学びの視点からの授業改善に努め、思考力・表現力やコミュニケーション能力の伸長を図る。また、課題を発見し、主体的・協働的に考え、課題を解決することができる探究力を育成する。</p> <p>・相互授業参観や研究授業の実施、各種研究会への参加など、研修・研究に積極的に取り組み、教職員の授業力の向上を目指す。</p>	<p>① 予習を中心とする主体的な学びのサイクルを身につけさせるとともに、基礎力の定着及び応用力・活用力等の育成を図る。</p>	<p>教務課 各教科 各学年</p>	<p>予習を重視することにより、主体的に深く考えて学習する習慣が身につけていると自己評価する生徒の割合が全体の</p> <p>A 90%以上である B 85%以上である C 80%以上である D 80%未満である</p>	<p>後期学校評価結果 予習を重視し、主体的に深く考えて学習する姿勢が身につけている生徒の割合が</p> <p>88% (B)</p>	<p>全体では昨年度より2ポイント、さらに前期より1ポイント上回り88%という結果となった。今後も、予習だけでなく復習を含めた学習サイクルが確立できるよう引き続き指導を行いたい。</p>
	<p>② オンラインでの学習環境を有効に活用し、「探究力」育成に重点をおいた授業を展開する。その際、生徒に対してオンライン学習の意図について十分な説明を行う。</p>	<p>SSH 各教科 各学年 教務課</p>	<p>授業において、「探究力」を身につけるためにオンライン学習を「有効に活用することができた」（「有効だった」の回答のみ）と考える生徒の割合が</p> <p>A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 40%未満である</p>	<p>後期学校評価結果 授業において、「探究力」を身につけるためにオンライン学習を有効に活用することができたと考えた生徒の割合が</p> <p>66.5% (B)</p>	<p>「探究力を身につけるためにオンライン学習をうまく活用できた」と感じた生徒は66.5%で、多くの生徒がオンラインの環境を学びに役立てられたと前向きに受け止めていることが分かる。一方で、約3割の生徒は十分に活用できなかったと感じており、学習環境やICTの扱いに慣れていないことに加えて、教員側の工夫として、オンラインでの探究活動の進め方を分かりやすく示したり、生徒がつまずきやすい場面をサポートしたりするなど、授業づくりや支援の仕方に改善の余地があると考えられる。</p>
	<p>③ 生徒の具体的な活動を評価するパフォーマンス評価をさらに充実させ、学校設定科目や課題研究における探究活動でルーブリックを作成し、それをを用いた評価を行う。生徒が自身のフィードバックに有効に活用できるように改善するとともに、ルーブリックの評価内容を生かせるよう、具体的な活用方法を生徒へ提示する。</p>	<p>SSH 進路指導課 各教科 各学年</p>	<p>「課題研究発表会」において、ルーブリックが自身のフィードバックに「有効に活用された」（「有効だった」の回答のみ）と考える生徒の割合が</p> <p>A 60%以上である B 50%以上である C 40%以上である D 30%未満である</p>	<p>年度末に調査する（アンケート形式） 「有効に活用された」（有効だったの回答のみ）と考えた生徒の割合が</p> <p>22.3% (D)</p>	<p>課題研究発表会において、ルーブリックによるフィードバックにおいて肯定的な回答をした生徒は70%であったが、「有効だった」と評価した生徒は22.3%にとどまった。この結果は、ルーブリックが学習改善に十分結びついていない可能性を示しており、活用方法の理解や指導の在り方に課題があることがうかがえる。今後は、ルーブリックの見方や使い方をより明確に伝え、生徒が主体的に改善へつなげられる仕組みづくりが求められる。</p>
	<p>④ 課題研究を通じて、生徒に主体的・協働的に課題を解決することができる探究力をつけさせる。</p>	<p>SSH 進路指導課 各教科 各学年</p>	<p>2年生、3年生の文系において、課題研究を通して「探究力がついた」と考える生徒が</p> <p>A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である</p>	<p>年度末に調査する（アンケート形式） 「探究力がついた」と考えた生徒の割合が</p> <p>64.0% (D)</p>	<p>「探究力がついた」（「やや探究力がついた」は含まない）と考えた生徒の割合が64.0%にとどまり、探究活動の目的やプロセスの理解不足、探究活動の質に課題があると考えられる。次年度は、探究プロセスの可視化、自己評価ルーブリックの活用に加え、人文科学系の研究におけるデータサイエンスの活用を図り、研究の質を向上させていきたい。</p>
	<p>⑤ 研究授業等を通して、教員自らが教科指導力を高め、授業の質的向上を図る。</p>	<p>教務課 各教科</p>	<p>生徒の一人一台端末（ChromeBook）を効果的に活用することで、自らの授業を改善することができたと自己評価する教員の割合が</p> <p>A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である</p>	<p>後期学校評価結果 私はICTの活用を工夫することで授業改善につなげた 90% (A) 私はアクティブラーニングの手法を積極的に取り入れている 88% (B)</p>	<p>ICT活用によって授業改善につなげている教員、またALの手法を積極的に取り入れていると回答した教員の割合が前期よりも2～3ポイント下がった。授業改善の方法はICT活用以外にもあり、「アクティブラーニング」という表現が公式文書上は現在使われていないことも影響しているのかもしれない。次年度はアンケート項目の文言を変えることを検討したい。また、次年度も相互授業参観等の取り組みのしかけを工夫して、さらなる授業改善ができる環境整備をはかりたい。</p>
<p>学校関係者評価委員会の評価</p>			<p>課題研究発表会では、全生徒が研究の成果を発表して、成果物としてポスターを作ることが、表現というコミュニケーションによって成立している。成果発表会では、ICTの活用や教科を超えた授業をされている。</p>		
<p>上記の評価結果を踏まえた今後の改善策</p>			<p>普段の授業でも、探究力や課題発見力を重視しており、課題発見型授業を精査して探究力につながるように、従来の教師主導の授業から主体的な授業への改善を引き続き行っていきたい。</p>		

令和7年度 学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	実現状況の達成度判断基準	最終評価	分析（成果と課題）及び次年度の対応
<p>2 個性が輝く学校</p> <p>・学習指導と進路指導の連携が取れ、3年間を見通した指導体制のもと、生徒に高い志を持たせ、一人一人の進路実現を図る。その際、低学年からのキャリア教育を充実させ、学ぶ意欲や進路意識の高揚を図る。</p> <p>・「文武両道」「自主自律」の精神のもと、学習活動のみならず部活動や学校行事、生徒会活動の充実を図り、豊かな人間性と社会性を育む。</p>	<p>① 第1学年より意欲的・主体的に取り組む生徒の育成を図り、個に応じた高い進路目標の設定を支援する。キャリア教育や進路選択に関する情報発信やしなを充実させ、高い進路志望の実現を応援する。第1志望を貫く精神と意識の涵養を図り、進路目標の実現に向けて、学年会・教務課・進路指導課・SSH推進室が連携した効果的な指導により学力を養成する。</p>	<p>進路指導課 教務課 各学年 SSH</p>	<p>難関10大学と国公立大学医学科を志望する生徒数（第2学年）の合計が</p> <p>A 192人（60%）以上である B 160人（50%）以上である C 144人（45%）以上である D 144人（45%）未満である</p> <p>難関10大学と国公立大学医学科の合格者数の合計（現役生と過年度生の合計）が</p> <p>A 70人以上である B 60人以上である C 50人以上である D 50人未満である</p>	<p>第2学年進路志望調査（7月）の結果 難関10大学 199人 国公立大学医学科 17人 のべ数216人（A） 実数206人（A）</p> <p>国公立大学入試結果 64人（B）</p>	<p>進路情報発信の見直し、キャリア教育の充実、学年会等との連携強化の成果が表れている。令和5～7年度の2年生同時期を比較すると、138人（R5）→167人（R6）→216人（R7）と高い進路目標設定の生徒が年々増加した。この高い志望の生徒たちをしっかりと支えるための教科指導力の向上が課題である。小松高校の進路指導体制を「こまつメソッド2.0」へとアップデートを進めていきたい。</p> <p>難関10大学合格者の現役と浪人の合計59人は令和以降最多。一昨年は47人、昨年は52人であり2年連続増加。現役生は昨年比で8名増加した。医学科との合計64人は令和以降最多タイであり、一昨年は50人、昨年は60人であったので、こちらも2年連続で増加した。難関大学を志望する生徒の増加にあわせて、教員側の教科指導力の育成・伸長と組織的な進学支援の取組強化が課題である。</p>
	<p>② 端正で品位ある服装容儀や挨拶の大切さを理解し、規律ある学校生活を送ることができるよう指導する。</p>	<p>生徒指導課</p>	<p>生徒の服装・挨拶などの生活指導が適切であると考える保護者の割合が</p> <p>A 95%以上である B 90%以上である C 80%以上である D 80%未満である</p>	<p>後期学校評価結果 生徒の服装・挨拶などの生活指導が適切であると考える保護者の割合が 96%（A）</p>	<p>昨年度（R6）後期から2ポイント上昇し、前期同様、A評価となった。身だしなみや挨拶、その他規範意識等について、自分事として捉え、自ら考え、積極的に行動できるよう、引き続き指導に努めていきたい。</p>
	<p>③ いじめが起きにくい、いじめを許さない環境を維持するため、すべての生徒が安心して、充実感をもって「みんなで何かをするのは楽しい」と考えながら学校生活を送るために、教育相談室等と連携を図る。</p>	<p>生徒指導課 教育相談室 各学年</p>	<p>みんなで何かをするのは楽しいと考える生徒の割合が</p> <p>A 95%以上である B 90%以上である C 80%以上である D 80%未満である</p>	<p>後期学校評価結果 みんなで何かをするのは楽しいと考える生徒の割合が 97%（A）</p>	<p>前期及び昨年度（R6）後期と変わらず、昨年度に引き続きA評価であった。生徒が安心して、また充実した学校生活を送れるよう、日々注意深く観察し、いじめの兆候を見逃さず、教職員や保護者、関係機関と連携して組織的な対応を心掛けていきたい。</p>
	<p>④ 挨拶運動や部活動運営委員会、部顧問会議等を通じて、生徒の部活動における活動規則の遵守や挨拶の励行、部室清掃の徹底を図る。また、自己肯定感を向上させる取組や、学年に応じた指導を、教職員全体で行う。</p>	<p>生徒会課 部同好会顧問</p>	<p>部活動が人間力の向上(学業との両立、挨拶など)につながったと考える生徒の割合が</p> <p>A 65%以上である B 50%以上である C 40%以上である D 40%未満である</p>	<p>後期学校評価結果 部活動を通じて、自分の人間力が向上したと考える生徒の割合が 59%（B）</p>	<p>R5年度の同時期（62.9%）R6年度（62.4%）に比べ、5ポイント減の結果。継続して、人間力の向上に繋がるよう部活動指導を推進する。おおむねできたと考えている生徒を加えた割合は昨年度比2ポイント増の97%となっている。</p>
	<p>⑤ 日々の清掃に加え、各学期ごとに大掃除や環境美化週間を設けて、校内美化を促進する。また、教室、廊下のゴミ箱を撤去し、ゴミの持ち帰りを推進し、節電、節水も、環境美化ポイントの指標に入れる。</p>	<p>保健環境課</p>	<p>環境美化意識を持って行動している生徒の割合が、</p> <p>A 95%以上である B 90%以上である C 85%以上である D 85%未満である</p>	<p>後期学校評価結果 環境美化意識を持って行動している生徒の割合が 94%（B）</p>	<p>評価結果は94%（昨年度比+3ポイント）であった。全体的に環境美化意識を持って行動している生徒の割合が多い。今年度は新しい取り組みを増やすのではなく、現行企画の内容の精選を実施してきた。さらに3学期の環境美化週間で意識の高揚を図りたい。日ごろの清掃活動などについても引き続き意識が高まるよう、環境美化委員会を中心に生徒主体で仕掛けていきたい。</p>

令和7年度 学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	実現状況の達成度判断基準	最終評価	分析（成果と課題）及び次年度の対応
2	⑥ 教科・学年および図書委員会と連携し、生徒の図書室利用を促進する。また、読書への関心を高め、知的好奇心の喚起に努めることで、総貸出冊数を増加させる。	図書室 各教科 各学年	年2回（春・秋）不読率の平均が A 50%未満である B 60%未満である C 70%未満である D 70%以上である	アンケート結果 （3回実施） 57.1%（B）	昨年度末の57.3%に対し、数値はほぼ横ばいとなった。中間評価（6月のアンケート結果）では、昨年度に比べて大きく改善していたが、年間を通しての改善には至らなかった。貸出冊数は昨年度と比べて微増しているが、現3年生が本好きな生徒が多く、貸出冊数の増加に貢献しているため、次年度彼らが卒業した後に、より難しい状況になると考えられる。生徒が本を読むことを身近に感じる取り組みを考えていきたい。
	⑦ 体育の授業を通じて、体力向上の大切さを理解させ、筋力・走力と、体力の源である持久力アップのための取組を行う。春（4、5月）と秋（10月）に持久走を測定し、タイムを比較する。	保健体育科 各学年	走力（持久力）の記録が、春より秋に向上した生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	持久走の記録を春と秋で比較し、向上した生徒の割合が 72%（B）	全体では、72%の生徒の記録が向上した。学年で見ると1年生は77%（昨年比+3ポイント）、2年生は76%（昨年比+5ポイント）の向上となった。3年生は部活動を終了するため数値があがりやすく、61%の生徒が向上した。また、男子と女子を比べると、今年度は男女ともに72%が向上し、昨年度の男子74%、女子66%と比較すると、女子が前年度より大幅に向上した。特に1年生女子が83%向上しており、今後も運動への積極的な参加を促したい。今後も、持久走のみならず、体力向上の大切さなどを感じることが出来るよう雰囲気づくり、指導・声掛けを大切に、進めていきたい。
学校関係者評価委員会の評価		学校の取り組みに対して保護者や生徒の評価は高い。今後も引き続き、取り組み内容の充実を図っていただきたい。			
上記の評価結果を踏まえた今後の改善策		学習指導と進路指導の連携を取り、3年間を見通した指導体制を整えていきたい。生徒の能力を最大限に引き出し、一人ひとりの進路実現を図っていききたい。			

3	地域から信頼される学校 ・学校公開やホームページ等を通じて本校の教育活動を積極的に情報発信し、保護者や地域から信頼される「開かれた学校づくり」を推進する。	総務課 教務課	学校は開かれた学校づくりに積極的に取り組んでいると考える保護者の割合が A 95%以上である B 90%以上である C 85%以上である D 85%未満である	後期学校評価結果 学校は開かれた学校づくりに積極的に取り組んでいると考える保護者の割合が 98%（A）	過去3年間のコロナの影響はほぼなくなり、保護者の学校行事へ関心度が高くなった。PTA主催の行事において、参加者が昨年度を上回った。保護者のニーズに応えられるように、授業公開やPTA行事、地域と連携した活動など、学校が積極的に開かれた場を提供していることが評価され、評価Aの高評価につながったと考える。
	・地域でのボランティア活動を推進するとともに、異校種間の連携を密にし、南加賀地区の基幹校としての自覚ある学校運営に努める。		生徒会課 部同好会顧問	校内の安全な環境を意識して、ボランティア活動に参加した部・同好会活動の数が全体の A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	ボランティア活動に参加した部・同好会活動の割合 94%（A）
学校関係者評価委員会の評価		保護者にしても生徒にしても、本校に対する満足度が高いのは、先生方の指導の賜物と思って本当に感謝している。			
上記の評価結果を踏まえた今後の改善策		保護者の学校への関心が非常に高い。保護者のニーズに応えられるように、今後も授業公開やPTA行事、地域と連携した活動を行っていききたい。			

令和7年度 学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	実現状況の達成度判断基準	最終評価	分析（成果と課題）及び次年度の対応
4 教職員の働き方改善 ・各自がワーク・ライフ・バランスやタイムマネジメントを意識して業務や部活動の効率化を進め、時間外勤務時間の縮減に努める。	① 教育的効果を考慮しつつ、行事・業務の整理を行うとともに、業務の平準化を進める。	副校長	行事・業務の整理・統合・精選により、校務の効率化が図られたと考える教職員の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	後期学校評価結果 行事・業務の整理・統合・精選により、校務の効率化が図られたと考える教職員の割合が 76% (A)	前期より12ポイント増加、昨年より1ポイント減少したが、評価はAとなった。前期は、土曜開催のPTA総会などの影響で、低かったと思われる。昨年度からこの評価が非常に高くなっており、一因としては、ICTの活用や採点業務省力化ソフトの導入、土曜ゼミの見直し等が考えられる。次年度に向けては、行事・業務を再検討していきたい。
	② 月2回の定時退校日、部活動の休養日等を設定し、さらに業務遂行の効率化を進める。	教頭	時間外勤務が80時間を超える教職員の割合が A 5%未満である B 9%未満である C 13%未満である D 13%以上である	R7.12月までの勤務時間調査 時間外勤務が80時間を超える教職員の割合が 8.2% (B)	6月は総体前ということもあり、部活動等で時間外勤務時間が80時間を超える教職員が多かった(10名)。また、今年度はインターハイ出場(ボート・ソフトテニス等)の部活動が昨年より多く、7月の時間外も100時間を超える教職員がいた。上位大会出場可否により時間外勤務の変動はあり得る。
学校関係者評価委員会の評価		昨年度に引き続き、教職員の校務の効率化が図られたと感じる割合が高いのは、どうしてなのか。			
上記の評価結果を踏まえた今後の改善策		校務の効率化については、働き方改革を意識している教員が若い方を中心に多い。特に土曜ゼミの内容の見直し、要因の一つにあげられる。今後も各部署の業務をできるだけ平準化するよう見直していきたい。			